



今も生き続ける博士

永井隆博士が白血病で死亡したのは昭和二十六年、今年で没後六十年になる。

永井隆博士が白血病で死亡したのは昭和二十六年、今年で没後六十年になる。

「二つの永井隆記念館」と題して四回にわたって書いたが、長崎、三万屋、韓国の中に韓

つこの如己の会のお陰で博士は今も生き続けているというのが実感である。

長崎の原爆記念日の八月九日、浦上教会での平和祈願ミサを伝える「カトリック新聞」



永井隆のまなざし

平成23年度 第一回企画展

如己の会は毎年いろいろな企画展をしている

の如己の会の記事があった。同会主催の読書感想文コンクールで入賞した中、高校生が韓国から巡礼に来た。

永井隆の生き方に感銘を受けた韓国テグ(大邱)の李大司教が韓国の人々に永井隆を知らせるため「愛の歌・平和の歌」という本を発刊したことは紹介した。その後、永井隆を顕彰する如己の会を韓国にも結成。毎年、中高生の永井隆に関する本の読書感想文コンクールを実施し、入賞者を長崎巡礼に招待している。李大司教の永井博士への情熱が伝わってくる。

先日訪れた島根県三万屋の永井隆記念館の名原館長から「家庭の友」という雑誌が送られて来た。「今、韓国で永井隆が熱い。韓国で永井を語るものは何か!!」という特集記事があった。

二〇〇六年(H18)に三万屋、長崎の如己の会のメンバーと永井博士の娘、茅乃さん、孫の徳三郎さんら三十人がテグの大司教を訪ねて韓国の如己の会と交流した様子を伝えるものだ。名原館長も参加されている。三万屋の如己の会の会員にカトリック信徒はほとんどいない。博士の故郷だから会員になった」という一般市民が多く、小さな村にとらわれず、博士の功績を伝えようという気持ちで伝わってくる。永井博士もそれを喜んでおられるだろう。

九月十一日付カトリック新聞の投稿欄に永井博士に関する記事があった。投稿したのはイエズス会の薄田昇神父。前記韓国訪問団の団長である。古くからの知り合いだが、神父は大阪釜ヶ崎の日雇い労働者など社会の弱い立場の人のために長く働かれ、現在八十二歳。第一線から退いて今は東京のイエズス会の老人ホームにおられる。それでも尊敬する永井博士のために投稿するなど前向きだ。

すぐ電話したが、永井博士の話をする

Nov

家庭の友

今、韓国で「永井隆」が熱い!
「韓国」で永井を語るものは何か!

代表の岩本功先生に会った。昨年

は一緒にベトナムに行ったが、先生は私の連載の好意的感想をよく言ってくれた。「藤屋さんの永井隆記念館の帳方屋敷跡の石碑」の回で永井博士と緑夫人のことがよくわかりました。実は私の父は永井博士と同級生なのです」

父上は博士と一緒に昭和七年に長崎医科大学を卒業。戦前は満鉄病院に勤め、二十二年に引き揚げて周東町高森に住むことになった。

た。大学のある長崎に行くべきか博士に相談すると「長崎は壊滅状態なので高森で開業された方がいい」との助言で山口県に住むことになった。

もし博士の助言がなければ私は今、長崎の人だったかもしれないと笑われる。

話を聞いて永井博士がますます身近に感じられる。人は人のかかわりで生きているのだと改めて思ったのである。

二〇〇六年十一月の「家庭の友」